

漢語奧旨全



文詞乃其書阿多々々。高山其末。恒山乃
其意より。さる所あり。一法中身つ。子川
此をやく世亦々々。其亦其乃々々々
了。天乃其魚昨古々々々。多々々々々
母摺真々々々上々。此家長乃新其ん
不之良。一々々々。也亦其利禄也。誰
々々。其々々。其々々。其々々。其々々。



きつてありし頃。法代ありの月乃大堰川。下
世ありし頃。すうし。男れおんく。九
福ありし頃。すうし。あつたの。きりく
花千重ゆき。きりく。すうし。きりく
ふれ。すうし。あつたの。きりく。きりく
すうし。あつたの。きりく。きりく。きりく
すうし。あつたの。きりく。きりく。きりく

源序ノ一

きつてありし頃。あつたの。河海乃波りし頃。
あつたの。鳥乃いりきりし頃。あつたの。い
あつたの。玉乃いりし頃。あつたの。いりし頃。
あつたの。日本紀乃信局に名のいりし頃。
あつたの。六條乃いりし頃。浪乃いりし頃。あつたの。
あつたの。いりし頃。あつたの。いりし頃。
あつたの。いりし頃。あつたの。いりし頃。

半通之孫常一。この年乃すまはさるん
終ま。しきこのおと。もまふらま。このしき
と。思良今さる。今ま。い。おほままの
し。か。く。あ。ち。は。た。ら。に。あ。す。ち。ま。ま。い。及
ま。す。中。一。も。あ。平。一。く。い。め。あ。ま。い。い。あ。の。い
本。は。あ。り。ま。い。総。又。は。垣。内。翁。は。許。に
本。入。飛。一。る。い。翁。代。り。ま。い。い。あ。の。い。あ。

ア。い。ま。い。ま。い。事。一。い。ま。い。あ。あ。あ。あ。あ
お。母。あ。は。い。ま。い。い。思。ひ。ま。い。ま。い。ま。い。ま。い。
あ。終。ま。ま。い。ま。い。は。乃。あ。い。ま。い。ま。い。古。あ。の。い。
名。分。乃。い。ま。い。一。九。あ。れる。い。ま。い。一。大。法。代。の
光。あ。い。ま。い。あ。い。ま。い。い。ま。い。い。ま。い。思。ひ。ま。い。ま。い。ま。い。ま。い。
あ。あ。あ。い。ま。い。物。法。よ。ま。い。ま。い。ま。い。ま。い。一。失。一
い。ま。い。あ。い。ま。い。日本。終。あ。い。ま。い。ま。い。ま。い。ま。い。

昭々たる大衆の爲に。女子の心を
好むは。その心を好む事。よければ。と。女子の
心を好む事。よければ。と。女子の

神武天皇紀元二千五百三十五年
十二月

本居學報

源序ノ三

源語 奥旨

近藤芳樹著

明治五年の東京日新堂の雑誌に。方今文明日進。學校の
盛あると。古來以て。嘗て。所ある。就中西京
に於て。中小學の設け。大小備。と。云々の末に。西京
乃女子を。從來容貌の美を以て。天下に冠。た。者あり。
今。才學を研。善。美を盡。以て。古
昔。式部清少納言。才且美あり。と。云ふ。と。西京の女子。豈
到底實用の學にあらず。今一兩年を。西京の女子。豈

此輩乃下み阿らんやとあるをよむ。予大に感ずるおも
へらく。予少年の時を思ふ。鬚を然る結丈夫たつ。式部の
著をよむ源氏物語を好む。終末昏をよみ阿るた涉獵し。
猶補注をよむせんとおもつりしに。此日誌をよむと猛
省を思ふ。實に赧顔の至りたるを。故に其志を翻し。法は
み筆を抛ちたりき。此頃某日の長支に倦て。机に倚り加
ふ。初ぼえむ一睡したりし。ゆふけの紀上臈の女
房。予が側み来りたるを。以て憂思を帯あるおもむ
に。予に以て辱らく。妾も一条のみうと結きゆ紀上東門

院に仕る。式部といふ女あり。妾むる源氏物語を著
はる多るに。とむ人妾が深意の阿る處をくらむ。たその
文辞をのむ善し。徒らみ好色の媒とをり。妾實にこれ
を愧ぶ。抑此物語を。いと權臣の跋扈を憎む。皇族の衰微
を憂ふ著をよむ各あり。其方も志する如く。仁徳天皇の
炊煙のまくなり紅を見そふはし。三年の調賦を免し。之
るは。一人の御仁心を及ぼし。萬民を救ふ御仁政とあ
し。あへるあり。これ天下を御心のまゝ。あへるあり。
然るを延喜の帝に至るは。冬の夜。貧民の寒き。堪えん

ことをおぼしめし。御衣を脱ぎおぼしめさる。そ
乃叡慮を難有けれ。此時貧民を救はせむ。こと
を聞け。かく一人は御仁心おぼしめさる。萬民は
おぼしめし。あふ御仁政のちのりしは。いふに。權
臣の勢を強くして。天下を叡慮乃まよえまほり。ごちた
まふこと能くごりしゆえなり。さるより。寛平上皇乃
菅公を拔擢し。冷泉のみつと。西宮殿を登庸し。あつ
し。となその權臣の偏執より。貶降せしめて。たまく他
氏の政を預る者なば。うく乃如く鋤き除き。いとも尊こ

き一世二世の皇族を。とちとく其門は家禮を
らむるに至る。世の中はあつ藤氏の掌握に歸したる
を。一人ごり眉を擧めし者な。妾心より。水鏡
憤るや。いふども。婦人の身なれば。いふんとも。せん
あ。こそよと。此物語を著はせり。其大旨は。ち
に源氏の君と。攝家の嫡子頭中將とを對偶し。て。頭中
將。この源氏の君は仕ふる。全く主従の如きさまに
なり。それより次第の昇進も。ち源氏を。頭中將よ
る。上等はす。め。皇族は。いふ。べ。支物といふこと

示し。源氏の子夕霧の君に至ると。頭中將の子柏木。其外の諸子を對耦とあり。猶夕霧を上等とす。是れも。皇后も。當時も。之を藤氏ありてハ居みはぬ。例あるを。はづめ。源氏の君乃養女。六条の御息所みせの御女みむすめを入内せし。後ハ源氏乃實子明石の姫君を入内せし。共に中宮とす。その御腹の白兵部卿宮を。東宮とす。おはし。夕霧の弟。女三の宮腹の薰大將と始。是攝家の諸子孫も戴おさき重んじて。東宮と同トさまふ。敬うやまひのつゝ如く作りあり。たきごも。見る人々。文章のめ

心をよせたり。まふ。こゝに眼を着る。わのちのりま。さ色。實をかく。筆の鋒すざを以てたし。攝籙の勢心せうしんと挫くじ。皇族と尊とくせんとき。その苦心くしんをかく。等閑とうかんのころとあふ。きり。今や聖天子御位を継み。ひて攝關將軍と廢せし。色。庶政と古より復し。あつるに妾の蓄懐ちくわいも。るに晴て。泉下の鬱念も。頓に散せり。然るを其方。半生の力を此昏も。尽し。あふ。更に妾が深意を解げき。日誌とよめて。忽ち此學を廢せんとするを。さす。愚ある者。あたと去て。以づく。つゝ立去りぬる。目覺る。枕り。げた

色は。蟬の聲さやゝに耳より夕日の影すて西ふ傾
けり。さうもくも怪しき夢を見しあはと。つづく思は。
實み式部が此書を作さる。此意ありてのこととあはす。
されを當時。一條の帝。此物語を見あむ。式部は日本紀
をとく讀める女をうべし。とのうまひよ。日本紀の
御局と稱せしとの。帝はあはのたするは。日本紀。神代
に起りて持統天皇み至る。その間數十代。朝威盛ん
まゝに。皇族尊とく。諸臣卑しく。上下の分正しあり
しに。奈良の御代以來。漸く攝籙の勢ひ強くなり。皇族

のつづく衰へたるを。式部心は憤りく。上古ハかくへあ
りし物と思ふより。皇族の源氏の君とつふを主と
す。攝籙の御子頭中将とつふを客とす。そまより次
々に。夕霧柏木白宮薰大将の類ひの。主客對耦し。空は架
く虚は憑りて。つらも巧みに。つやをめぐりて。作らる
物あり。權門の嫌疑を憚り。深意を表にあらはさず。韜
晦ましめあけりしを。一人もそのふしを知らる人な
りし。一條の帝はあり。悟らせあることあり
て。日本紀をとく讀める女をうべし。その御言を

つと。あつて譽に。誰もく。日本紀の御局とい稱したり
し。と。殆千年に近きまで。更ふ其名義を辨ふる人あり。
つむに皇族を尊ひ。權門を卑しむ。深意の大義へうづも
きはせり。彼安藤爲章の七論もこれに及ぶ。藤井高尚
の日本御局考の如き。殊に迂遠乃説まき。采るに足
らざるや予もかく。茅塞を一夢み開けり。以て
まうき。とに何れぞ。あをれ式部御堂殿の私せん
と。あつて。拒とて従へざる。到陽を以て。王室の衰
微と悪く。大志と蓄へなぐ。その意ひと。孔子春

秋を何れぞ。あつて。物とて。げと。あつて。慷慨の心と
紙上より。生涯と全くせし。は。まことに賢女の鑑
とも。あつて。あれと。實用の學と。何れぞ。何れ
の實用の學とせん。さへ。上等の女子と。此書と學
ばん人。まつ式部の日記とよ。其自ら。身と慎
と。平常と。後と學ぶ。か。ら。其人。必ら
ず。貞順婉淑。君子の配と。恥と。あつて。あつて。
西京の女子の。諸國の婦人。中等より以下の者
の。中小學と入て。物學せん。心と。日誌に。如

くさるるべし

まゝ此物語に。弘徽殿の女御。又しく後宮に侍ひあは
て。太子をも産まひひつゝ。後に入内しあはる藤壺
乃女御の。されば立后ありし事を記せる。さるる皇后
となりしあはに。貞静純一の女を選ばせあはるゆゑ
に。さるる皇族臣族あははるはるはる。以て。聖
武の御代。藤原淡海公の女光明子の。夫人より直ちに
に皇后あ降りあはる。これ其實は藤氏の權威盛んを
言ふより。妃は。つゝさる夫人を以て。押して皇后とら

たるものあり。後宮職貞令を勘るに。妃は四品以上。夫
人に三位以上。嬪は五位以上とあり。これあはる時
に。妃の内親王あはる。夫人の臣族の貴女。嬪の臣族の
あはる。やゝ位卑き女あり。故に妃夫人嬪共。とて御
あはる。その出自あはる。三等の分ちありて。上等
妃あれば。貞純の女と選ばせあはる。理あはる。あはる
あはる。この必を内親王の妃あはる。皇后とすべ
き。却て夫人ありし光明子を皇后としたりし。當
時淡海公執權あり。勢ひの強うりしを以ての故あり。

然れども妃といひ夫人といふに既に。抑詰ぐのふ名
目も尊卑あるまゝに。つひふこれを嫌む。以つとあ
く其名を廢し。妃夫人の二貞をひとりに併せ。女御と
改め。嬪を更衣と改めたるも。とあ藤氏のせしわざな
る也。式部まゝに眼を着けし。皇族の藤壺の女御と。藤
氏の弘徽殿の女御より。さ紀の皇后とすたるも。上
古は妃夫人の差別ありしを。抑りへば。まゝ皇族を
尊といひ。藤氏を貶せし一證とすべきなり。

予近藤翁の門に在て。源語を讀みつゝ。浅見に
して其一斑を窺ふると能はさりき。然るに翁の
卓識。よくその真旨を探り。明らけしを併して。讀者を
一を惑ふことありしむ。實に讀むに深切ありと
いふなり。且其文の閑雅ある。始を長日午睡中の一
夢に托し。以て徐々其説起して。其要旨を述べ。當時
の形勢と論じ。現今實用のみに及せり。抑揚の巧
なる。翁の筆鋒も。まゝ皇學を志す者の固陋を挫くに
足きりとつゝなり。然るに此書。源語真旨と題して。

一冊子となり。源語を読む者の。尤も注意すべき大
要を示せるは各處に。始を東京新聞紙中へ載せ
る所の西京女學校の条を借きて筆を起せる。恐ら
くは。大家の著作に似ざるの誹りをん。夫も新聞
誌を讀むもの。一時の談柄に備ふるものありて。一
閱し終るば。反古に属するもの多し。源語を讀むは
この者。豈新聞誌中の論を信じて。紫式部清少納
言を以て。西京進學の婦女子に及ぶとせんや。願
くば前後を削り。只長日の一夢より書起し。當テ

實用の事小及同。以て世に公りせんこと。誠。

明治八年五月

井關美清

美清の公法説。以ひおぼせし餘蘊なり。仍て前後を
削らんとして。思ひ出さるること。何り昔宋の僧に居
簡といふる詩人あり。業水心。その詩集に上生日の
詩あるは論ひて。林下名作將以無遠不可使千載之
後集中有上生日詩と云きつけたるを。居簡その詩
を除くとして。その語を詩集の端に鏤せたるより
を。五總志に載せし。前輩相與之情類如此といなり。

予もまゝの類に倣ひて。西京女子の件を其終よ抄記。
美清の語を卷末に記せるものあり。

近藤芳樹識

源語奥旨終

源九

明治九年十二月出版

著述者

近藤芳樹

第三大區拾壹小區四ッ谷
仲町三丁目拾四番地寄留

山口縣士族

第壹大區九小區竹川町
拾二番地平民

出版人

松村幸太郎

